

ブータンの歴史、および日本との交流史

熊谷誠慈

京都大学こころの未来研究センター

2017年10月、京都大学はブータン王国ソナム・デチュン・ワンチュク王女を招聘し、ブータン・京都大学友好60周年記念行事を開催した。その様子はテレビでも放映されたが、多くの人がブータンと京都大学との60年という交流の長さに驚いたことであろう。今後、わが国がブータンとより良い関係を構築していく上で、ブータンの歴史と、両国の交流史を理解しておくことは重要である。そこで本稿では、同国の歴史と、わが国との交流史を簡単に整理しておく。

ブータンの歴史

ブータン王国は、ヒマラヤ山脈の東端の南斜面に位置する。面積は九州を一回り小さくした程度の大きさであるが、標高差は極めて大きい。北は7000mを超える極寒の高山地帯であり、南は標高150m程度の亜熱帯地域である。多岐にわたる気候風土が揃っていることから、ブータンには多種多様な動植物が生存している。また、各地域は山々に囲まれて交通が遮断されてきたことで、相互に異なる言語や文化を形成してきた。そうした言語や文化の多様性は、GNH（国民総幸福）などを生み出したブータン文化の根底に存在しているものと思われる。

現在のブータンの地には、4000年前には人が定住していたと推定されている。7世紀以降、チベット文化圏の南端の国として、チベットから大きな影響を受けるようになった。7世紀前半には、チベット（吐蕃）のソツェン・ガンポ王（581-649）が、キチュ寺（西ブータンのパロ県）などの仏教寺院を建立したと伝承される。また、タクツァン寺（西ブータンのパロ県）など、8世紀にブータンを訪問したとされるパドマ・サンバヴァ（グルリンポチェ）に帰される寺院も複数存在する。

11世紀以降、チベット仏教の諸宗派が、南隣のブータンの地で積極的に布教を始め、荘園化を

進めていった。3000メートルを超えるチベット高原で得られる資源には限りがあり、米・木材・紙・薬草・染料・竹製品などの産物が豊かなブータンは、チベット側にとって、荘園として大変魅力的な地域であった。後に国教となるドゥク派は、13世紀にブータンに進出を始めた。

17世紀前半に、ドゥク派第17代座主のシャブドゥン・ガワン・ナムギェル（1594-1651）がブータンの地を統一し、それまでヒマラヤの一地域にすぎなかったブータンが、初めて統一国家となった。ブータンは現地の言葉で「ドゥク派の国」（ドゥククル）と呼ばれる。なお、ブータン（Bhutan）という呼称は、サンスクリット語のボータータ（Bhotānta、チベットの端）の発音がヒンディー語化され、英語化されたものである。以後、長期にわたりドゥク派による宗教政権が続いた。

19世紀には、イギリスやインドの干渉により、国家運営が不安定となり内乱が多発した。そうした状況下で、中央・東ブータンの領主であったウゲン・ワンチュク（1862-1926）がブータン全土を統一し、1907年に初代ブータン国王となった。以後、同国ではワンチュク家により王位が継承されることとなった。2006年にはジクメ・ケサル・ナムギェル・ワンチュク陛下（1980-）が第5代国王に即位し、現在に至る。

ブータンを開国し近代化を推し進め、国民総幸福（GNH）政策を進めたのは、第4代国王ジクメ・シンゲ・ワンチュク陛下（1955-）である。今回の60周年記念行事で招聘したソナム・デチュン・ワンチュク王女は、第4代国王の4名の王妃のうちドルジ・ワンモ・ワンチュク王妃との間に生まれた娘君である。現国王とは異母兄妹ということになる。

ブータンと日本および京都大学との交流史

京都大学とブータンとの交流は1957年に遡る。ケサン・チョデン・ワンチュク第3代国王妃一行が来日した当時、ブータンと日本との間に正式な国交がなかったために、京都大学の桑原武夫教授、芦田譲治教授が接待したことが、両国の交流の起点となった。

翌1958年には、京都大学山岳部OBで当時大阪府立大学助教授であった中尾佐助が、日本人として初めてブータンを訪問した。1959年に出版した『秘境ブータン』は、翌1960年に、日本エッセイストクラブ賞を受賞し、ブータンの名が日本に知られることになった。

その後、中尾佐助の教え子であった西岡京治が、1964年より、海外技術協力事業団（現・国際協力機構）のコロンボプランの農業技術指導者としてブータンに赴任。以後、28年間にわたってブータンの農業振興に尽力し、1980年には、外国人として初めてダシヨーの爵位が授与された。以後、日本はブータンに対する開発援助を強化していった。

1970年には京都大学山岳部OBの栗田靖之がブータンを初訪問し、その後のブータンと日本との学術交流の基礎固めを行った。

1981年、川喜田二郎、桑原武夫、東郷文彦、中尾佐助、中根千枝、西堀栄三郎などを発起人として日本ブータン友好協会が設立された。初代会長は桑原武夫（京大人文学部研究所・元所長／京大山岳部OB）。現会長は小島誠二（元パキスタン、タイ王国大使）、顧問は栗田靖之（京大山岳部OB・国立民族学博物館名誉教授）。1957年の桑原・芦田両教授によるケサン王妃接待が、日本ブータン友好協会の設立に大きく繋がった。

1985年、京都大学医学部の堀良平教授を隊長、国立民族学博物館の栗田靖之助教授を副隊長とする、京都大学の学術登山隊が、未踏峰のマサコン峰を初登頂した。

1986年、日本とブータン王国が、外交関係の樹立に関する書簡交換を行い、公式な外交を開始した。以後、国交はあるものの、日本とブータンのどちらも相手国に大使館・領事館を持たず、双方の在インド大使館が外交の窓口となっている。

1987年、皇太子殿下が日本の皇族としてブータンを初訪問された。その後、1997年には秋篠

宮殿下ご夫妻がブータン訪問され、2017年6月には秋篠宮眞子内親王殿下がブータンを訪問された。

ブータンからは、1989年、昭和天皇天喪の礼へのご参列のため、第4代国王陛下が初来日された。翌1990年には平成天皇即位の礼ご参列のために同国王が再来日された。2011年に現国王である第5代国王・王妃両陛下が来日されたのは記憶に新しい。そして、2017年10月に、同国王の妹君にあたるソナム・デチェン・ワンチュク王女が来日、京都大学での記念行事に参加され、皇后陛下、皇太子殿下、秋篠宮ご夫妻と面会された。

近年のブータン学の動向

ブータン研究の歴史は古くない。わが国では、中尾佐助が1958年にブータンを初訪問し、ブータン研究の扉を開いた。しかし、ブータンへの入国や長期滞在が困難であったことから、ブータンはその後も長らく秘境の国のままであった。

ブータンの歴史を解明した人物としては、マイケル・アリス、ジョン・アルドゥッシ、今枝由郎の3名が挙げられる。特に、マイケル・アリスが1980年に出版した『*Bhutan*』は、先史時代から近代に至るまでのブータン史を整理したものであり、現在もブータン研究のバイブルとなっている。今枝由郎は、ブータン中世史を詳細に調査している。

2000年に入り、「国民総幸福」の理論化、政策化が進むと同時に、王立ブータン研究所（Centre for Bhutan Studies and GNH Research）を中心に、幸福指標の研究が進んだ。同研究所が主となり、国際GNH会議が定期開催されるようになり、GNH研究が盛り上がりを見せるようになった。また、同研究所は*Journal of Bhutan Studies* (JBS) を刊行し、ブータンの学際的研究が加速した。2015年には国際ブータン学会（ISBS: International Society for Bhutan Studies）が設立され、今後、国際的にブータン研究が加速していくものと思われる。

わが国においても、中尾佐助の『秘境ブータン』が出版されて以降、多くの個人研究が公表されてきた。2010年には、松沢哲郎（当時、霊長類研究所長）を代表世話役として京都大学でブータン友好プログラムが開始され、全学的なブータン研

究が始まった。2011年には日本GNH学会が設立され、2017年には日本ブータン学会が設立され、国内のブータン研究が大きな盛り上がりを見せている。

2017年10月25日には、ブータンと京都大学の交流60周年を記念し、ソナム・デチェン・ワンチュク王女ご臨席のもと、国際シンポジウムが開催され、山極寿一総長、松沢哲郎高等研究院副院長の講演に続き、京大のブータン研究者が研究紹介を行った。また、翌26日には、ソナム・デチェン・ワンチュク王女ご一行と、京都大学の複数部局（医学研究科、京大付属病院、霊長類研究所、野生動物研究センター、防災研究所、法学研究科、教育学研究科、東南アジア地域研究研究所、こころの未来研究センター、地球環境学堂）とで個別懇談会が行われ、今後のブータンと京都大学との学術交流について活発な意見交換がなされた。特に、同王女は法学が専門であることから、法学研究科との懇談に多くの時間が割かれた。

京都大学は、桑原武夫、芦田譲治両教授が築いたブータンとの学術交流の遺産を受け継ぐ形で、これまで霊長類研究所や教育学研究科、東南アジア地域研究研究所などで散発的にブータン研究が行われてきた。2010年のブータン友好プログラム開始以降、全学的なブータン研究が進められ、若手のブータン研究者の育成や、ブータンを通じた学生の教育が行われるようになった。2011年以降、王立ブータン大学や保健省などとの学術交流協定も締結された。理想的な環境基盤が整ったことで、今後さらなるブータン研究、教育が進展することが期待される。